編集後記

長らく紀要編集委員長として本誌の編集責任を担ってこられた前学術研究所長が、定年で退職され、所長、編集長の交代となりました。研究の発信拠点として、編集委員や事務局の各位には負担をかけることでしょうが、最善を尽くしたいと思います。いずれにしても、本学から研究成果なりテーマを発信する意義は、時代の要請からして今後高くなっていくことは間違いないでしょう。

大学が担う教育、研究、社会貢献という教育基本法に謳われた役割のなかで、教育と社会貢献の二つは、近年より重みを増しつつありますし、象牙の塔の研究を唱える主張は昔日の面影を失っています。それだけに研究の意味を再確認し、ふさわしい方法論やテーマ、創造性を確保することは、改めて眼前に立ち塞がっている難題です。

ただ、巨大化している科学研究が同時に巨額の研究投資を必要とするようになった現代にあって、チームによる研究は必須条件になっており、理系・技術系の研究でも「紙と鉛筆で」といわれた往時とはすっかり様相が変わりました。しかし、あえて言えば、私たちの大方にとっては、個人の研究の積み重ねで研究実績が決まるのは不変で、「紙と鉛筆」はまだ大きな比重を占めています。社会科学の分析手法で、イデオロギーなり論・倫理的に構図を描き、成果を世に問う。情報関連の多額の研究投資を要する分野を本学も抱えてはいますが、収集、分析し、展望を世に問う原型は相変わらず変わっていません。

しかし、とかく内向きでやってきた私たちも、グローバル化に対処し、研究競争からフリーとはいえない時代に確実に踏み込んでいます。文科省や関連機構の方向は、研究成果を機関リポジトリ(IR)を組織の制度として整備することを求め、研究成果を登録し、閲覧を容易にして、研究活動の透明化、ひいては研究格差の解消を指向しています。博士論文のリポジトリ登録を含む研究成果の公開や著作権保護の動きは、研究の高度化、グローバル化の趨勢が否応なく個々の研究者にも負荷となることを示すものでしょう。

そうした事情に応える一環として、すでに実施されていた内部レフェリー方式を、今年度は投稿要領にも示すように、学外のレフェリーにも審査をお願いすることにいたしました。無審査で自由に伸びやかな出稿ができる従来方式が応募を促す効用があることは、他大学の経験にも聞き及びますが、高質の研究を目指すことはもはや本学も放棄を許されないと考えられます。関係者の強い意志と決断により、本号から研究論文に公式のレフェリーチェック制が採用され、適用されたことを喜びたいと思います。

（論集編集部）

九州情報大学研究論集　第 16 巻

2014 年（平成 26 年）3 月 31 日　発行

編集兼発行者　研究論集編集委員会

発　行　所　九　州　情　報　大　学
福岡県太宰府市宰府六丁目 3 番 1 号
TEL 092 (928) 4000　(代)

印　刷　所　エース印刷株式会社
福岡市中央区大濠一丁目 6-9
TEL 092 (741) 9090